

# 学生自ら課題を発見し 解決策を考える

—実践体験型教育—

経済学部 教授 金 秉基

## 1. PBL を取り入れた実践体験型教育

世界が直面している様々な課題を自ら発見し、その解決策を考えるきっかけを与えることを目標に、ゼミでは次の二つの教育を行った。第一に、途上国が抱えている様々な課題を自分の目で確かめ、現状改善のための解決策を考える。第二に、世界のビジネス中心地であるシリコンバレーでイノベーションとアントレプレナーシップを考える。

## 2. ラオスプロジェクト

国際社会が掲げる、誰一人置き去りにしないという「持続可能な開発目標 (SDGs)」の実現のために、小さな力であっても自分にできることは何かを考えるきっかけを与えてきた。普段のゼミでは、途上国の貧困問題や不平等、教育開発、SDGs などについて調べてディベートしたり、グループごとにテーマを設定し、そのテーマに関連する資料やデータを収集し、データ分析を行ったりする。またラオス国立大学などと連携しながら、ゼミ生自ら「ラオス大学生との交流活動や小学校支援活動、現地企業訪問」を企画する。春学期に学んだ知識と自ら企画したラオスプロジェクトをベースに、夏休みには実際ラオスに足を運んで次の三つの活動を行う。

### ①ラオス国立大学での学生交流 (SDGs 1, 2, 4, 6 について学ぶ)

両大学の学生が特定のテーマについて発表し、ディベートを行う。この活動を通じて、ラオス国立大学の学生は日本についての理解を深める。ゼミ生は、ラオスの社会・経済・

教育などについて理解を深めるとともに、対ラオス支援について考える。

図1 ラオス国立大学での学生交流



### ②少数民族の小学校支援活動 (SDGs 3, 4, 6, 12 について学ぶ)

滋賀大学経済学部近隣の小学校で集めた文房具や古着、サッカーボールなどを物が不足しているラオス農村部の小学校へ持って行き寄贈する。この活動を通じて、貧困問題や資源配分の重要性を学ぶ。また、小学校では「なぜ手を洗わなければならないのか」を教えることで小学生の衛生意識を高めるだけでなく、ゼミ生がSDGsを一層深く理解する。

図2 農村小学校での文房具寄贈



図3 手洗いを教える



### ③現地企業や JETRO、JICA 訪問 (SDGs 17 について学ぶ)

ラオス現地企業を訪問し、フェアトレードや BOP について学ぶ。また、JETRO や JICA を訪問し、地域の経済・社会に関する説明を受けることでラオスの経済状況、日本の開発援助や国際協力について詳しく学ぶ。

上記の活動をしながら収集したデータやアンケート調査を用いて論文を執筆し、全国大学生論文大会で発表する。2011 年から行ってきたラオスプロジェクトは、ゼミ生が自ら課題を見つけ、その解決策に向けてプロジェクトを企画、実施、事後評価する実践体験型教育である。

### 3. シリコンバレーで学ぶイノベーションと企業家精神

未来社会をデザインしていく若者が異文化を理解し、多様なバックグラウンドを持つ人々とコミュニケーションが取れる人材育成、そしてグローバル企業のイノベーションとアントレプレナーシップのトレンドを学ぶことを目標に、シリコンバレー研修を行った。

ゼミでは、「なぜ企業や労働者はシリコンバレーに集積するのか」について調べるとともに、社会から求められるデータサイエンス、AI、スタートアップなどに関する資料を収集する。夏休みにはシリコンバレーに出向き、二週間の研修を行う。この研修を通じて今後社会で活躍するであろう学生に机上で学んだ知識を実際に応用するきっかけを与える。研修の内容は主に次の三つで構成される。

①アントレプレナーシップや AI 分野の専門家、シリコンバレーで起業し、企業を経営している CEO などの講師からシリコンバレーのビジネストレンドについて学ぶ。

②Apple, Google, Intel, Tesla などのグローバル企業を訪問し、それらの企業の設立背景や成長過程、イノベーションについて学ぶ。

③参加学生がグループごとに分かれ、お互い

が協力しながら商品開発と資金調達を通じて起業を目指したプロジェクトに取り組み、完成したプロジェクトを講師や CEO の前でプレゼンテーションする。

この研修を通じて、企業集積と外部経済、イノベーション、シリコンバレーのビジネス文化についての理解を深める。

図4 企業訪問 (Google)



図5 企業訪問 (Intel)



図6 プロジェクトの発表

